多賀城市文化財調査報告書第71集

矢作ヶ館跡 ほか

—矢作ヶ館跡第3次調査—

—市川橋遺跡第31次調査—

—市川橋遺跡第32・33次調査—

平成15年3月

多賀城市教育委員会

序　　文

多賀城市は、奈良時代に陸奥国府が置かれて以来、約1,300年という長く、豊かな歴史に培われたまちです。この誇りうる歴史の蓄積を現代に活かし、さらに将来に向けて積極的に継承していくことが、本市に課せられた重要な責務の一つであると考えております。

さて、本書は平成14年度に国庫補助事業として実施した矢作ヶ館跡第３次調査、市川橋遺跡第31・32・33次調査の発掘調査報告書です。このうち、本市の北東部に所在する矢作ヶ館跡は、江戸時代の記録にその名が見え、本市の中世を語るうえで欠くことのできない遺跡ですが、これまで詳細については不明でした。今回、その中心部と考えられる場所で確認調査を実施し、中世の大規模な堀跡等を発見しました。これによって、発掘調査のうえからも、はじめてここが中世城館であることが確認できたわけで、大変貴重な成果であったといえます。次に、本市の西部に所在する市川橋遺跡においては、３箇所で発掘調査を実施しました。この遺跡は、特別史跡多賀城跡の南正面に位置しており、近年大規模な古代のまち並みが発見されています。３箇所とも調査面積は狭いものの、いずれにおいても古代の建物跡を発見し、「古代都市多賀城」の姿を復元するうえで貴重な成果を提供するものとなりました。

本市においては、以上のような国庫補助事業による継続的な調査のほか、毎年様々な開発原因により発掘調査を実施しています。これら一つ一つの調査の積み重ねが、本市の具体的な歴史像の解明につながり、ひいては新しいまちづくりに活用できるものと期待しております。

最後に、発掘調査の実施や本書の刊行にあたり、多大なご協力をいただきました多くの方々に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

多賀城市教育委員会
教育長　櫻井　茂男

例　　言

1　本書は、平成14年度の国庫補助事業として実施した矢作ヶ館跡第３次調査、市川橋遺跡第31次調査、市川橋遺跡第32・33次調査の成果をまとめたものである。
2　市川橋遺跡第31～33次調査における遺構の名称は、第１次調査からの一連番号である。
3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うことになったが、本書中の各調査で使用した座標値は、従来の国土座標「平面直角座標系Ｘ」を用いて設定している。
4　挿図中の高さは、標高値を示している。
5　土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を使用した。
6　本書の執筆は、調査員全員の協議をもとにⅠ・Ⅱを若松啓文、Ⅰ・Ⅲを島田敬、Ⅳを相澤清利・鈴木孝行が担当し、編集は島田が行った。また、遺物整理に際しては、臨時職員の小野寺雪子、小岩博江、今野妙子、熊谷純子、横山佳織、渡邊奈緒の協力を得た。
7　本書の作成に際し、墨書土器の解読にあたっては平川南氏（国立歴史民俗博物館）のご教示を得た。
8　調査に関する諸記録および出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　矢作ヶ館跡・市川橋遺跡の概要 …… 1
Ⅱ　矢作ヶ館跡第３次調査 …… 2
Ⅲ　市川橋遺跡第31次調査 …… 14
Ⅳ　市川橋遺跡第32・33次調査 …… 20

調査要項

1　調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井茂男
2　調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　高倉敏明
3　調査概要

遺　跡　名	所　在　地	調査面積	調　査　期　間	調査担当者
矢作ヶ館跡第３次調査	留ヶ谷二丁目地内	824㎡	平成14年７月18日～８月27日	石川俊英、若松啓文
市川橋遺跡第31次調査	高崎字水入地内	25㎡	平成14年11月５日～11月22日	島田　敬、文屋　亮
市川橋遺跡第32次調査	市川字鴻ノ池地内	28㎡	平成14年11月27日～12月17日	相澤清利
市川橋遺跡第33次調査	市川字鴻ノ池地内	36㎡	平成14年11月27日～12月18日	鈴木孝行、菊池　豊

4　調査協力者　　伊藤寛敦　岩井正博　斎藤次夫　鈴木文雄　鈴木啓子　湯浅幸浩
大木建設㈱　㈱大和ハウス工業　多賀城市城南土地区画整理組合
後藤秀一　佐久間光平　柳澤和明　岩見和泰　西村　力（宮城県教育庁文化財保護課）　本田裕之（塩竈市教育委員会生涯学習課）
5　調査参加者　　赤間栄二郎　浅野喜久男　遠藤　実　大場勝喜　小野玉乃　加藤昭一
鎌田　傳　菅野恵子　日下正夫　熊谷サツキ　佐々木軍治　塩井一征
菅原絹代　鈴木太仲　鈴木寿二　角田静子　南条美岐子　橋本　務
早坂　剛　平山節子　福永孝二　藤澤拓司　真野勝雄　宮下喜代平
宮本一男　山下裕子　山田吉之助　渡辺ひで子　渡辺ゆき子

Ⅰ．矢作ヶ館跡・市川橋遺跡の概要

第１図　調査地の位置

１．矢作ヶ館跡

矢作ヶ館跡は多賀城市北東部の留ヶ谷地区から塩竈市袖野田地区にかけて所在し、東西200m、南北150mに及ぶ古代・中世の遺跡として登録されている。本遺跡の周辺地形は、塩竈丘陵から派生した低丘陵の末端に大小の谷が入り込む、起伏の多い複雑なものとなっている。その中で本遺跡は、東西方向にのびる標高20～25mの低丘陵の東端部に立地し、比高差10～20mと起伏に富んだ地形となっており、現在は東北本線によって南北に分断された状況になっている。本遺跡は『多賀城町誌』（1967）以降、『風土記御用書出』（1774）所載の「屋はきか館」に比定されている。本遺跡の発掘調査は東北本線北側の丘陵部分で２次にわたって実施されており、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などが発見されたが、中世城館の痕跡及び中世の遺物は確認されなかった。

２．市川橋遺跡

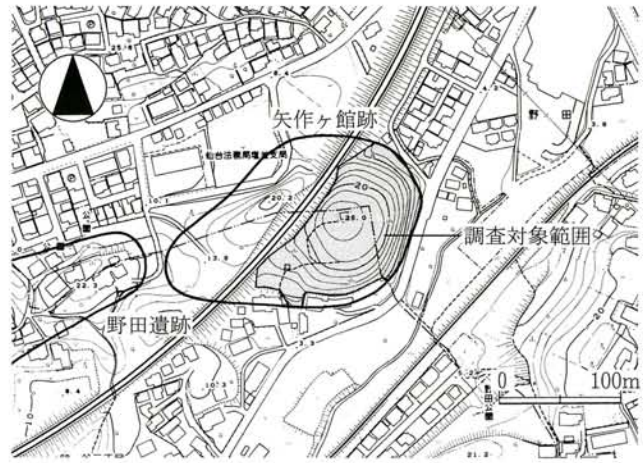
市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の西側及び南側に位置している弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。その範囲は、東西1,400m、南北1,600mに及んでおり、多賀城跡の所在する低丘陵と砂押川に挟まれた標高２～３mの沖積地に立地している。

これまで数多くの発掘調査が実施されており、その成果として、多賀城南面に施行された古代の方格地割りの発見が最も注目される。これは南北大路、東西大路と呼んでいる二つの主要道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておおよそ１町四方の区画を形成したものである。その範囲は、東西約1,100m、南北約750mに及び、道路跡のほか、河川と橋、役人や庶民のすまいなど多数の遺構が発見されている。

Ⅱ．矢作ヶ館跡第３次調査

１．調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成に伴う確認調査として実施したものである。地権者の鈴木氏より、同地における宅地造成計画が平成14年５月20日付けで提出された。計画は多賀城・塩竈両市にわたる丘陵上の果樹園約10,400㎡を造成対象とし、遺跡内の丘陵全体を標高差で10m程度切り土し、遺跡の現状を著しく改変するものであったため、関係各機関の協議が必要と判断された。関係者協議は同年６月25日に現地において行なわれ、宮城県教育庁文化財保護課、多賀城市教育委員会文化財課、市埋蔵文化財調査センター、塩竈市教育委員会生涯学習課、地権者、施工業者の６者で地表面観察を行なった。その結果、古代の遺物が表面採取されたことから本遺跡を古代の遺跡として認識はできるものの、丘陵にみられるいくつかの平坦部が中世城館の遺構（曲輪・平場など）を反映しているとは考えにくいという見解で一致し、確認調査が必要であると判断した。発掘調査については、塩竈市分は県文化財保護課の指導・助言を受けて塩竈市教育委員会生涯学習課があたり、多賀城市分は多賀城市埋蔵文化財調査センターがあたることを確認して、協議を終了した。７月２日、再度現地において多賀城・塩竈両市の関係機関による調査区の選定、土層堆積状況の確認などを行なった後、両市間で発掘調査実務に関する協議を行なった。７月４日、宮城県庁において県文化財保護課、市埋蔵文化財調査センター、塩竈市教育委員会生涯学習課の３者で今後の発掘調査に関する最終的な協議を行なった。７月８日、地権者より発掘調査依頼及び発掘調査承諾書が提出され、調査前の協議が終了した。



第１図　調査区位置図

７月12日、調査に先立って調査区を23ヶ所設定した。調査区は、現地形が中世城館の遺構を反映するか否かの確認と古代・中世の遺構の検出を目的に、丘陵頂上部及び南～西斜面にくまなく設定した。調査面積は824㎡で、多賀城市分調査対象面積約5,700㎡の約14.5％に及んだ。発掘調査は７月18日から開始した。大小の重機による表土除去と平行して、作業員を導入して器材搬入を行ない、表土除去が終了した調査区から順次精査に移行した。事前協議で果樹の現状保存が前提となっていたために低い果樹棚下での作業となり、特に小型重機での表土除去は困難を極めた。７月22日で大型重機による表土除去を終了し、各調査区の精査及び写真撮影、断面図作成を進めた。同日、丘陵上部西側調査区で大規模な溝跡を検出し、同じく東側調査区、塩竈市分の調査区でも同規模の溝跡を検出したことから、関係機関３者でこの溝跡を丘陵上部に巡らされた中世城館の堀跡と認定した。加えて、堀跡外側に黒褐色土の堆積層が確認され、層中より遺物が少なからず出土したことから、これを遺物包含層と認定した。７月26日、小型重機による果樹棚下の表土除去を終了した。７月26・29日には、測量基準点の設置及び各調査区の光波実測を行なった。８月２日からは、各調査区の平板実測を行なった。同日より作業の進捗状況を勘案しながら、堀跡と遺物包含層の範囲確認のために丘陵頂上部及びその西側の拡張を随時行ない、８月７日までに終了した。８月９

日、各調査区の図面作成を完了し、器材を搬出して実質的な調査を終了した。その後、８月12・13日に大小の重機による埋め戻しを行ない、重機では埋め戻しが困難な調査区に関しては、８月26・27日に作業員を導入して埋め戻し作業を行なった。８月27日午前で埋め戻し作業を終了し、器材を搬出して、全ての調査を終了した。

２．調査成果

(1) 発見遺構

今回の調査では一部遺構を掘り下げて精査した調査区もあるが、確認調査であるために全体としては遺構検出をするにとどめた。発見した遺構は、古代の竪穴住居跡３軒・柱穴６基、古代の遺物包含層、中世城館の堀跡・土橋跡、中世の柱穴６基、時期不明のピット94基・溝跡20条・土壙９基である。遺物は表土及び堆積層から出土しているが、大部分は表土からの出土である。

以下、検出遺構の時代的相違から標高20m前後を境界として、丘陵上部の調査区（１～17Ｔ）と丘陵下部の調査区（18～23Ｔ）とに分けて概要を説明する。

なお、検出した遺構については調査の性格上及び紙幅の関係上、以下のように扱った。竪穴住居跡については検出した規模を示した。柱穴については柱痕跡のあるもののみを柱穴と認識し、その他はすべてピットとして扱った。溝跡については検出した幅と長さを示し、土壙については全体を検出したものについてのみ、その規模を示した。また、今回は確認調査であるため、検出遺構に遺構番号は付さなかった。

丘陵上部　１～17Ｔ

１～８Ｔは、丘陵頂上部の果樹棚下に設定した調査区である。これらの調査区では、耕作機械（トレンチャー）による攪乱溝や施肥のための攪乱穴が随所に検出され、後世の攪乱が著しいことが確認された。

１Ｔでは表土下21～55㎝で地山面に達し、柱穴３基、ピット１基を検出した。柱穴はほぼ円形で直径20～25㎝、柱痕跡は円形で直径10～18㎝である。ピットはほぼ円形で、直径18㎝である。堆積層は検出されず、遺物も出土しなかった。２Ｔでは表土下20～39㎝で地山面に達し、柱穴３基、ピット３基を検出した。柱穴はほぼ円形で直径18～30㎝、柱痕跡は円形で直径10～12㎝である。ピットは隅丸方形で、一辺15～25㎝である。堆積層は検出されなかったが、遺物は土師器片が出土した。１・２Ｔの柱穴群は形状・規模から推測すると中世のものとみられるが、調査区の制約上性格については不明である。

３～８Ｔでは表土下８～70㎝で地山面に達し、堀跡を検出した。５Ｔの堀跡については完掘して断面観察を行なったが、堀跡埋土から遺物は出土しなかった。堀跡の上幅は3.5～5.3mで下幅約2.0m、深さは堀外の地山面と堀底の比高差でみると1.1mである。なお、堀の内側（丘陵頂上部中心側）の地山面が堀の外側より最大で1.7m高いことは確認できたが、堀内縁部に土塁の痕跡は検出されなかった。３・５・８Ｔでは、地山直上に均質な黒褐色土層を検出したものの、他の調査区では堆積層は検出されなかった。黒褐色土層は丘陵頂上部の東～南面に環状に残存しており、３Ｔでは層厚10～20㎝、８Ｔでは層厚10～15㎝で検出された（図２）。５Ｔでは黒褐色土層が層厚8～18㎝確認され、その範囲は調査区のさらに東側へ広がるものとみられる（図版５）。７Ｔでは、南東から北西方向に伸びる幅約2.3m、長さ2.8m以上（推定4.0m）の地山部分が検出され、この部分が堀跡に設けられた土橋跡とみられる（図版８）。３・４・６～８Ｔの表土及び堀跡埋土から遺物は出土していないが、５Ｔの表土から施釉陶器の破片が出土している（第

4図)。

9～12Tは、丘陵頂上部より2.5～3.0m低い南側緩斜面及び平坦部の果樹棚下に設定した調査区である。9・12Tでは表土下12～45cmで地山面に達し、遺構、堆積層は検出されず、遺物も出土しなかった。10Tでは表土下11～34cmで地山面に達し、堆積層は検出されなかったが、ピット1基を検出した。ピットの形状はほぼ円形で、規模は直径18cmである。遺物は出土しなかった。11Tでは表土下12～36cmで地山面に達し、堆積層は検出されなかったが、ピット2基を検出した。ピットの形状は円形で、規模は直径20～22cmである。遺物は土師器片、須恵器片、近世以降の瓦片が出土した。

13～17Tは、果樹がまばらな西側斜面に設定した調査区である。各トレンチで堀跡を検出し、13・14Tでは堀跡を完掘して断面観察を行なった。堀外堆積土の断面では、上層にいくに従って黒褐色土から均質な地山の明赤褐色土へ変化しており、堀開削時の廃土が堀の外側に順次積み上げられていった様子が観察された。堀外堆積土は黒褐色土層上面からの層厚が5～50cmで、黒褐色土層の範囲とほぼ同じ広がりになるものと推測される（第3図・図版10)。堀内埋土は堀底より黒褐色土や暗褐色土を主体として均質かつレンズ状に堆積していることから、堀は自然堆積により徐々に埋没したものと推測される。堀の造り替えの痕跡は確認されなかった。13～17Tの堀外には3～8T同様、広範囲に黒褐色土層が確認された（第2・3図)。13・14Tの黒褐色土層中からは土師器、須恵器、須恵系土器の破片が出土した（第4図)。このことから、この層はおおむね古代を中心とする生活面であると推測されるが、丘陵上部がどのように利用されていたかについては不明である。15～17Tでは、遺物は出土しなかった。

3～8・13～17Tで検出した堀内埋土の最上層は黒褐色土に地山ブロックが混じっているものが多いことから、自然堆積によって埋没していき、最終段階で人為的に埋められたものとみられる。しかしながら、遺物が出土していないために埋没した時期については不明である。

丘陵下部　18～23T

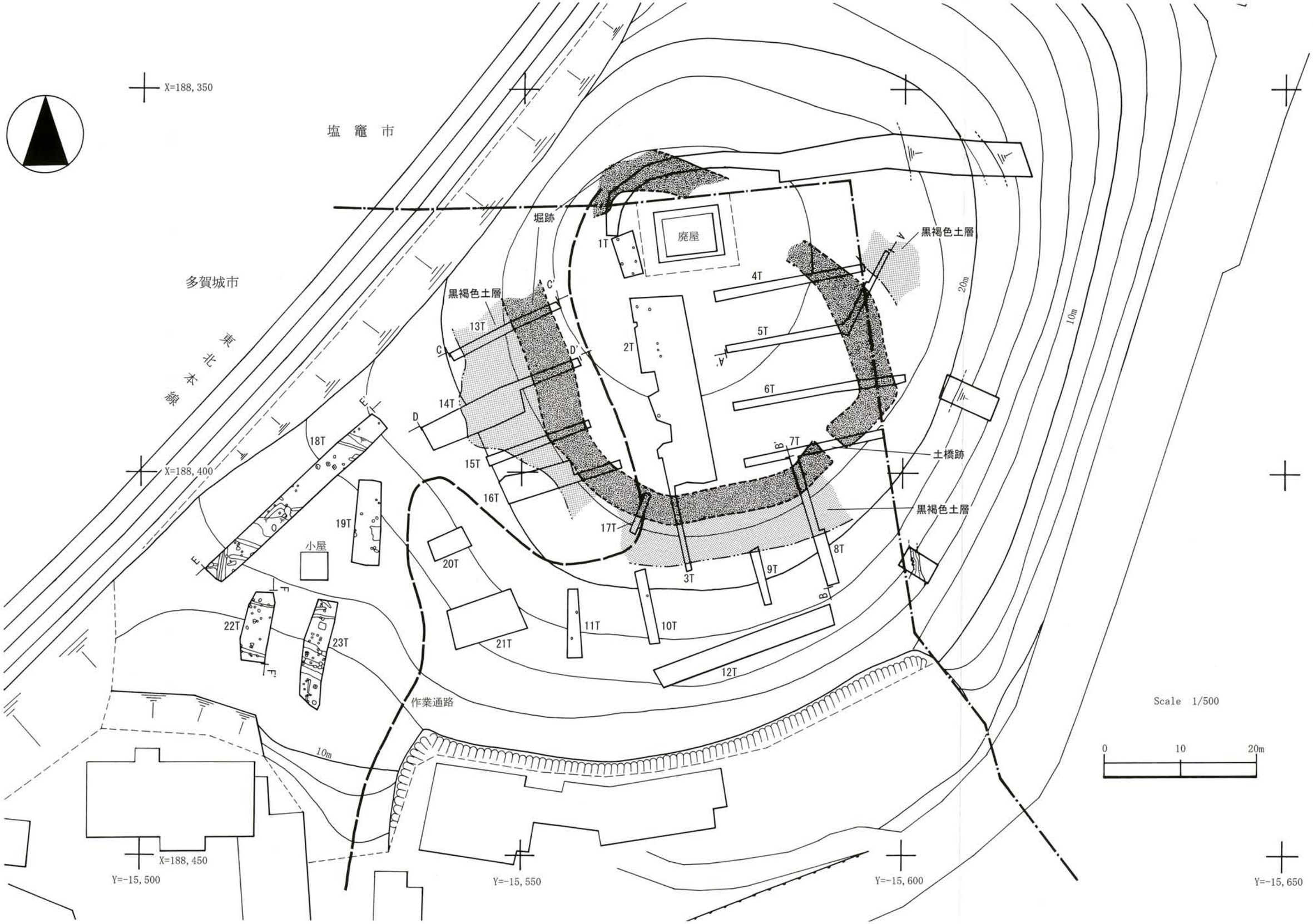
18～21Tは丘陵西側斜面に設定した調査区であり、19～21Tでは表土下5～50cmで地山面に到達し、堆積層は検出されなかった。

18Tでは竪穴住居跡2軒、柱穴3基、ピット23基、溝跡11条、土壙6基を検出した。竪穴住居跡2軒のうち、調査区西端で検出したものは1.5m×1.3m以上であり、もう一方は被熱により赤変した煙出ピットのみの検出で、その形状は円形で直径18cmである。柱穴は隅丸方形で一辺40～60cmであり、柱痕跡はほぼ円形で直径20～30cmである。柱穴の形状や規模から、古代のものとみられる。ピットはほぼ円形で、直径12～40cmである。溝跡は幅20～56cmで、長さ0.5～4.3mである。土壙は40～60cm×90～100cmである。

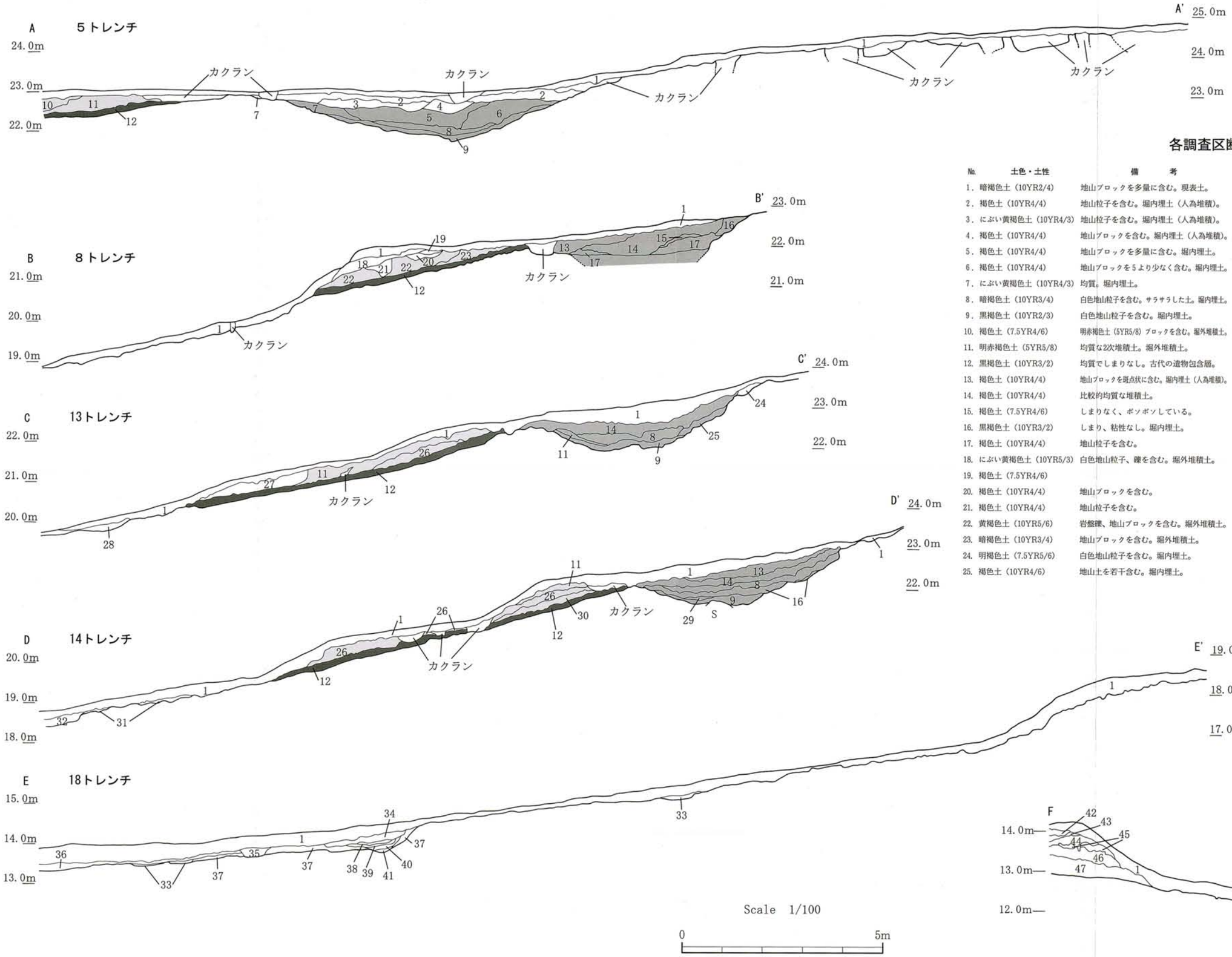
19Tでは竪穴住居跡1軒、ピット9基、土壙1基を検出した。竪穴住居跡の規模は1.8m×1.3m以上である。ピットは円形で、直径18～40cmである。両トレンチの表土から土師器、須恵器の破片が出土した。

20・21Tでは遺構、堆積層は検出されず、遺物も出土しなかった。

22・23Tは丘陵裾部の比高差約1.4mの斜面から畑地にかけて設定した調査区である。両調査区北側の斜面では堆積層を層厚約0.8mで検出したが、平坦な畑地では表土下16～50cmで地山面に到達した（第3図・図版12・13)。22Tではピット22基、溝跡2条、土壙1基を検出した。ピットはほぼ円形で、直径10～40cmである。溝跡は幅20～42cmで長さ3m以上である。土壙はいびつな長方形で40×70cmである。23Tでは柱穴3基、ピット33基、溝跡7条、土壙1基を検出した。柱穴は隅丸方形で一辺30～50cm、柱痕跡は


X=188,350
X=188,400
X=188,450
Y=-15,500
Y=-15,550
Y=-15,600
Y=-15,650
塩 竈 市
多賀城市
東北本線
堀跡
廃屋
黒褐色土層
土橋跡
小屋
作業通路
1T
2T
3T
4T
5T
6T
7T
8T
9T
10T
11T
12T
13T
14T
15T
16T
17T
18T
19T
20T
21T
22T
23T
10m
20m
Scale 1/500
0
10
20m

第２図　遺構全体図

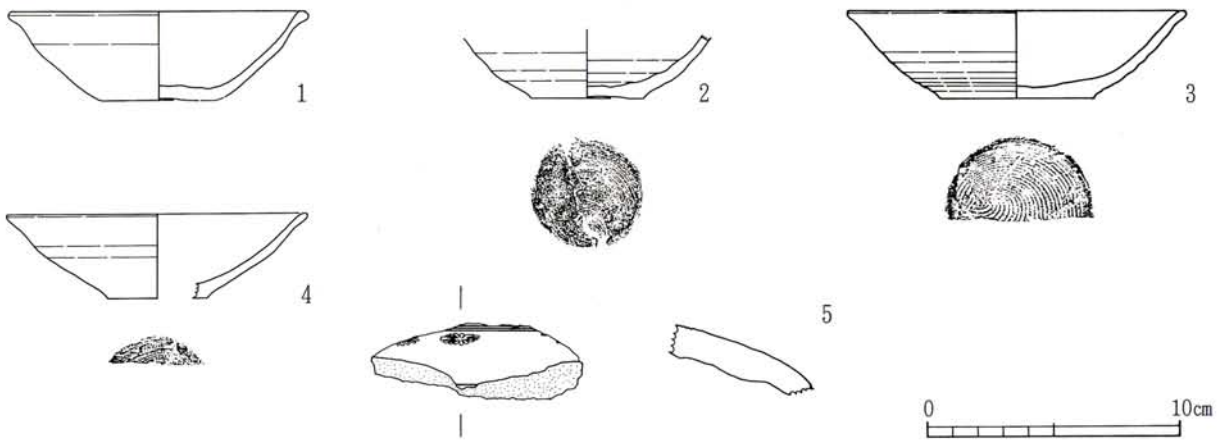


各調査区断面土層注記

No.	土色・土性	備考
1.	暗褐色土（10YR2/4）	地山ブロックを多量に含む。現表土。
2.	褐色土（10YR4/4）	地山粒子を含む。堀内埋土（人為堆積）。
3.	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山粒子を含む。堀内埋土（人為堆積）。
4.	褐色土（10YR4/4）	地山ブロックを含む。堀内埋土（人為堆積）。
5.	褐色土（10YR4/4）	地山ブロックを多量に含む。堀内埋土。
6.	褐色土（10YR4/4）	地山ブロックを5より少なく含む。堀内埋土。
7.	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	均質。堀内埋土。
8.	暗褐色土（10YR3/4）	白色地山粒子を含む。サラサラした土。堀内埋土。
9.	黒褐色土（10YR2/3）	白色地山粒子を含む。堀内埋土。
10.	褐色土（7.5YR4/6）	明赤褐色土（5YR5/8）ブロックを含む。堀外堆積土。
11.	明赤褐色土（5YR5/8）	均質な2次堆積土。堀外堆積土。
12.	黒褐色土（10YR3/2）	均質でしまりなし。古代の遺物包含層。
13.	褐色土（10YR4/4）	地山ブロックを斑点状に含む。堀内埋土（人為堆積）。
14.	褐色土（10YR4/4）	比較的均質な堆積土。
15.	褐色土（7.5YR4/6）	しまりなく、ボソボソしている。
16.	黒褐色土（10YR3/2）	しまり、粘性なし。堀内埋土。
17.	褐色土（10YR4/4）	地山粒子を含む。
18.	にぶい黄褐色土（10YR5/3）	白色地山粒子、礫を含む。堀外堆積土。
19.	褐色土（7.5YR4/6）	
20.	褐色土（10YR4/4）	地山ブロックを含む。
21.	褐色土（10YR4/4）	地山粒子を含む。
22.	黄褐色土（10YR5/6）	岩盤礫、地山ブロックを含む。堀外堆積土。
23.	暗褐色土（10YR3/4）	地山ブロックを含む。堀外堆積土。
24.	明褐色土（7.5YR5/6）	白色地山粒子を含む。堀内埋土。
25.	褐色土（10YR4/6）	地山土を若干含む。堀内埋土。
26.	明赤褐色土（5YR5/8）	黒褐色土（10YR3/2）土を含む。堀外堆積土。
27.	黒褐色土（10YR2/3）	
28.	褐色土（10YR4/4）	地山ブロックを含む。しまりなし。
29.	暗褐色土（10YR3/3）	地山ブロックを含む。しまり、粘性に欠ける。堀内埋土。
30.	明赤褐色土（5YR5/8）	黒褐色土（10YR3/2）を16より多く含む。堀外堆積土。
31.	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山粒子を含む。
32.	暗褐色土（10YR3/3）	地山粒子、地山ブロックを含む。
33.	オリーブ褐色土（2.5Y4/3）	地山粒子、炭化物を微量含む。
34.	黄褐色土（10YR5/6）	地山ブロックを含む。
35.	暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）	地山ブロック、炭化物を含む。
36.	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山粒子を多量に含む。
37.	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山粒子、小礫を斑点状に含む。
38.	明黄褐色土（10YR6/8）	5㎝大の礫を含む。
39.	オリーブ褐色土（2.5Y4/6）	5㎝大の礫をわずかに含む。
40.	褐色土（10YR4/4）	地山粒子を含む。
41.	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山粒子を含む。
42.	黄褐色土（2.5Y5/4）	地山粒子、小礫をブロック状に含む。堆積層。
43.	黄褐色土（2.5Y5/6）	地山粒子、小礫をブロック状に含む。堆積層。
44.	オリーブ褐色土（2.5Y4/4）	地山粒子、5㎝大の礫、炭化物を含む。堆積層。
45.	にぶい黄褐色（10YR4/3）	地山粒子を含む。堆積層。
46.	褐色土（10YR4/4）	地山粒子、炭化物を含む。堆積層。
47.	黒褐色土（10YR3/2）	地山粒子、炭化物を含む。古代の遺物包含層。
48.	黒褐色土（10YR3/2）	地山粒子を含む。
49.	黒褐色土（10YR3/）	地山粒子を含む。しまり、粘性に欠ける。
50.	黒褐色土（10YR2/3）	地山粒子、炭化物を含む。しまりあり。

第3図　各調査区断面図

ほぼ円形で直径12～18cmである。柱穴の形状や規模から古代のものとみられる。ピットはほぼ円形から隅丸方形で、直径14～40cm、一辺35～40cmである。溝跡は幅16～82cm、長さ1.2m～3.3m以上である。土壙は歪んだ長方形で、70×90cmである。両トレンチの表土から、土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、近世以降の陶器、瓦の破片が出土した。



単位：cm

No.	出土地・層位	種別	器種	特　　徴	口径（残存率）	底径（残存率）	器高	写真図版	登録番号
1	14T・黒褐色土層	土師器	杯	（内・外面）ロクロナデ（底部）磨滅	11.9（1/24）	4.6（15/24）	3.55	－	2
2	14T・黒褐色土層	須恵器	杯	（内・外面）ロクロナデ（底部）回転糸切り	－	4.4（24/24）	－	－	3
3	23T・L－1	須恵系土器	杯	（内・外面）ロクロナデ（底部）回転糸切り	13.4（2/24）	6.0（13/24）	3.5	－	18
4	22T・L－1	須恵系土器	杯	（内・外面）ロクロナデ（底部）回転糸切り	12.0（9/24）	4.0（10/24）	3.5	－	8
5	5T・L－1	施釉陶器	瓶子	（外面）ロクロナデ→平行沈線・印花文→施釉（内面）指圧痕→ロクロナデ	－	－	－	1・2	1

第4図　出土遺物

(2) 発見遺物

今回の調査では、半数の調査区で遺物が出土したものの、いずれも細片で脆いため器形を復元するのが難しく、図示できたものはわずかである。

遺物は、古代から近世以降のものが出土している。最も多いのは古代の土器で、土師器、須恵器、須恵系土器が出土している。器種は杯、高台付杯、甕である。須恵系土器が少なからず出土しているので、須恵系土器が出現する10世紀以降もこの丘陵が何らかの形で利用されていたことがうかがえる。

出土遺物の中で特に注目されるのは、5Tの表土出土の施釉陶器片である（補注1）。この施釉陶器片は外面に平行沈線が上下2段に施され、その間に印花文が2つ押印されたものである。この平行沈線（櫛描文）は古瀬戸前期後半の瓶・壺類に一般的に施されるもので、印花文も同時期に使用が増加するとされている。また、内面には指圧痕から回転ユビナデ調整の順に調整痕が残っており、これらは古瀬戸の大形の瓶・壺類に多くみられる粘土紐輪積み成形（紐輪積み成形）時の調整痕と同様のものとみられる。この破片に残る平行沈線の復元直径と破片の曲線から器形は瓶子とみられ、上記の特徴から、この瓶子片は藤澤良祐氏の古瀬戸前期様式編年の、前Ⅳ期の瓶子Ⅱ類にあたると考えられる。前Ⅳ期は13世紀末を含まな

い13世紀後葉に位置付けられている（註１）。

古瀬戸前期の瓶子を含む大形瓶・壺類は、中世墓の火葬蔵骨器として出土する事例が多く、生活関連遺跡からの出土例は鎌倉遺跡群以外では少ないという傾向をもつとされるが（註１）、今回の調査では生活関連痕跡はもとより中世墓とみられる遺構も検出されておらず、どのような理由で丘陵頂上部に搬入されたかについては不明である。

３．矢作ヶ館跡について

矢作ヶ館の名称の初見は、『風土記御用書出』（1774）所載「留ヶ谷村風土記」（註２）古館の項で、『（前略）一　古館　二」一　野田」屋はきか館　竪四十間　横廿五間（中略）右二館共誰御居館と申儀并年月共相知不申候事（後略）』としている（註２）。この後、矢作ヶ館に関する記述は見られず、『多賀城町誌』（多賀城町誌編纂委員会編〈1967〉以下『町誌』）まで待つことになる。『町誌』（355頁）では、「（前略）野田屋敷には六軒あって矢矧館（やはぎたて）とよばれる古館がある。玉川堤の南隣の小高い山で上は約一反歩の平地をなし、周囲に土塁及び外堀の跡が残っている。今は梨畑になっているが、ここは、留守家の主要家臣である逸見遠江守の居館であったといわれる。（後略）」と述べている。矢作ヶ館跡の比定については、『町誌』編纂時の現地の地表面観察によって土塁、外堀が観察されたために城館跡と認定したものと読み取れるが、その館主の比定に関しては根拠が提示されていないために、不明といわざるを得ない（補注２）。

聴き取り調査によると地権者宅は代々屋号を「古館（ふるだて）」と称し、周辺住民も本遺跡を「古館」と呼んでおり、本遺跡が古館＝中世城館跡と認識されてきたことがわかる。しかし、『史料　仙台領内古城・館』第三巻（〈紫桃正隆　1973〉623頁）では「（前略）二、規模、構造　高さ約二五米、東西一〇〇米、南北五〇米ほどの楕円形平場が館址と伝わるが、今はすべて屋敷地や、果樹園と化し、遺構らしいものは何もなくなった。（後略）」と記されており、矢作ヶ館跡は城館の痕跡がみられないとされている（補注３）。鈴木氏宅でも、地表面観察で土塁や外堀跡と認識できるような地形の起伏があった記憶はないといい、『町誌』編纂時期にあたる1960年代以降は丘陵上部の地形改変はしておらず、現状のままだという（補注４）。

『町誌』記述と聴き取り調査との間には齟齬があり、『町誌』の指す「矢矧館」は現在の矢作ヶ館跡ではない可能性もある。聴き取り調査の中で「古舘」は現在の本市伝上山地区北端との話もあり、その場所は近年まで梨畑で、『町誌』記述の「玉川堤の南隣の小高い山」という表現にあてはまりそうな地形を呈していたようである。しかしながら、現状では宅地開発によって往時の地形を全くとどめておらず、『町誌』のいう「矢矧館」が伝上山地区にあったか否かを確認することはできない。

ただ言えることは、現在の矢作ヶ館跡が古くから「古館」と称されており、今回の確認調査によって中世城館であると判明したことである。矢作ヶ館跡が『町誌』でいうところの「矢矧館」と同一かどうかについてはもはや確認できないが、城館名はともかく、この場所がかつて中世城館として存在したことは事実のようである。

4．まとめ

(1)　丘陵裾部で古代の竪穴住居跡3軒、柱穴6基を検出し、土師器の杯・高台付杯・甕、須恵器の杯・甕、須恵系土器の杯、瓦の破片が出土した。丘陵上部に環状に分布する古代の遺物包含層の広がりを確認した。

(2)　丘陵頂上部で中世城館の堀跡、土橋跡、中世の柱穴6基を検出し、表土からではあるものの中世陶器古瀬戸の瓶子片が出土した。堀跡外側に堀開削時の廃土の堆積層が広範囲に確認された。

(3)　丘陵裾部で近世以降の施釉陶器の甕・碗、瓦の破片が出土した。

(4)　時期不明のピット94基、溝跡20条、土壙跡9基を検出した。

（註1）　藤澤良祐「古瀬戸窯址群Ⅲ―古瀬戸前期様式の編年―」『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第3輯』 1995）
藤澤良祐 「9．中世陶器 〔1〕古瀬戸」（『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995）

（註2）　『多賀城市史』第5巻　歴史史料（一）（1985）482頁

（補注1）古瀬戸片の出土状況は、堀跡掘り下げ時の廃土を埋め戻す際に発見している。地権者鈴木氏からの聴き取り調査では、少なくとも戦後は丘陵下部から頂上部へ土砂を運搬したことはなく、また他所から土砂を搬入して耕作土にしたこともなく、腐葉土などの肥料も丘陵内で賄ってきたということである。よって、この瓶子片が他所から搬入された可能性は低く、本来この丘陵頂上部で用途不明なものの、古瀬戸が何かに使用されたものとみてよいだろう。

（補注2）「逸見遠江守」は『留守分限帳』の『御館之人数』にその名が見え、この他にも『伊達正統世次考』（巻之九上　天文十三年十月廿一日条）にその名が見えるが、矢作ヶ館跡や周辺地域との関連性については不明である。『御中館之御分帳』には矢作ヶ館跡の〝矢作〟を名字とする「やはきたしま」（矢作但馬カ）の名が記されてはいるものの、「逸見遠江守」同様、矢作ヶ館跡との関係は不明であり、矢作ヶ館跡の館主比定は困難である。

（補注3）加藤孝・野崎準『多賀城市内の館跡　―中世陸奥国府周辺遺跡の考古学的考察―』「東北学院大学東北文化研究所紀要」第5号　1973（『中世陸奥国府の研究』東北学院大学中世史研究会編　1994　再録）では以下のように述べる。

⑦　矢矧館跡　市内留ヶ谷字野田の山林中、これも歌枕で名高い「野田の玉川」の向かいの丘陵中にある。標高10メートルほどの舌状に張り出した台地上に、南側には幅三メートル、高さ〇・五メートルほどの土塁が約五〇メートルにわたって残り、土塁の外側は地山を削り、急斜面に加工してある。北側には土塁はほとんど残っていない。現在、中央部を国鉄東北本線と引込線が横断しており、宅地や畑になっている部分も多いため、現状確認はむずかしい。中央北寄りには径一〇メートル、高さ一メートルほどの円形の土壇があり、その西には井戸跡も残っている。（中略）<『風土記御用書出』を引用。筆者註>

とあり、多賀城町誌は、この館跡を「矢矧館」であるとしている。

加藤・野崎両氏がここでいうところの館跡は野田遺跡のこととみられ、「円形の土壇」は野田遺跡中に現在もその痕跡をとどめている。加藤・野崎両氏のいう矢矧館跡と本報告の矢作ヶ館跡とは別であるとみられる。

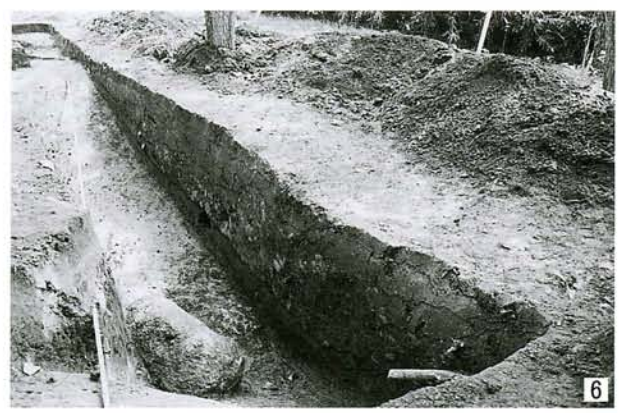
（補注4）鈴木氏の父世代からの伝聞ではあるが、この丘陵は以前は杉などの針葉樹林であったものを開墾して果樹園を造成しており、その際に丘陵斜面、特に北側急斜面は果樹栽培が容易なように人力で段々畑状に造成したという。耕作機械も容易に上げられない急斜面であったために造成は全て人力であり、大規模に地形改変は行なえる状況ではなかったということである。また、近年に至っても造成当時のままに果樹園を営んでいるということである。

加えて、これも伝聞であるが、現在開削されて東北本線となっている丘陵部分に城館跡があったとも言われているようであるが、その痕跡がどのようなものであったかを確認できないので、伝承があるということにとどめておきたい。

写真図版 1

1．古瀬戸瓶子〈表〉（図 4 ,R-2）
2．古瀬戸瓶子〈裏〉

3．矢作ヶ館跡 全景（南東上空より）
　　多賀城市教育委員会撮影
4．堀跡全景（塩竈市調査分）
　　塩竈市教育委員会提供
5．5 トレンチ　黒褐色土堆積状況（西より）
6．5 トレンチ　堀跡全景（南東より）



7．8トレンチ　黒褐色土堆積状況
8．7トレンチ　土橋跡・堀跡（西より）
9．14トレンチ　堀跡完掘状況（西より）
10．13トレンチ　堀外堆積土・黒褐色土堆積状況（東より）
11．13トレンチ　堀跡完掘状況（東より）
12．22トレンチ　遺構検出状況（北より）
13．23トレンチ　遺構検出状況（北より）

Ⅲ．市川橋遺跡第31次調査

1．調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理事業地内における個人住宅建設に伴うものである。住宅の基礎工事にあたっては、長さ８ｍ、直径約14㎝の鋼管を40本打ち込む、いわゆるパイル工法を採用するため、地下遺構への影響が懸念された。そのため、発掘調査実施の協力を地権者に求め、平成14年10月30日に承諾書の提出を受けたことから、事前調査として発掘調査を実施するに至った。

第１図　調査区位置図　（■ は古代の道路跡）

当該地は、区画整理事業に伴う宅地造成の際に約1.3ｍの厚さで盛土されていたため、現地表面から遺構面まではかなりの深さがあり、調査区の掘削に伴い多量の排土が出ることが予想された。よって、敷地内での排土場所の確保と、隣接住宅や道路に対して地盤沈下等の影響が生じないよう配慮したことから、調査区の設定にあたっては面積を制約せざるを得なかった。

調査は11月５日から開始し、はじめに重機により盛土等の除去を行った。その結果、現地表面から1.5～1.7ｍ下で遺構面を検出した。11月８日に遺構検出状況を写真撮影し、その後遺構の掘り込みを開始する。これと併せて1/20の縮尺で平面図作成も実施した。なお、当該地は区画整理事業に伴う市川橋遺跡第26次調査のＣ18区の南側に隣接していることから、発掘基準線とその表示は、区画整理事業関連の各調査（市川橋遺跡第23～29次調査）と共通にした。すなわち、国土座標「平面直角座標系Ｘ」を使用して設定し、座標値Ｘ＝－189,200.000、Ｙ＝13,850.000をそれぞれ東西・南北方向の基準線とした。そして、これらの基準線の交点を調査の原点とし、１ｍ離れるごとに東西方向はＥ１・Ｅ２・Ｅ３……、Ｗ１・Ｗ２・Ｗ３……と順に表示し、南北方向についても同様に表示した。調査は、11月18日までに調査区の北壁及び東壁の断面図作成を終了し、11月19日に掘立柱建物跡及び溝跡の掘り込み、図面作成を終えたのち全体の写真撮影を行う。11月20日には補足調査とともに、当該地を現状に復するため人力及び重機による埋め戻しを開始し、11月22日をもって調査を終了した。

2．調査成果

(1)　基本層序

Ⅰ層　盛土前の表土。現代の水田耕作土。

Ⅱ層　調査区全域に堆積している黒色土。層厚５～15㎝で木炭粒、焼土粒を多く含む。また、10世紀前葉に降下した灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。

Ⅲ層　調査区南東部のみに薄く堆積する浅黄色土。

Ⅳ層　調査区の北西部から南東部にかけて顕著に認められる黒褐色土。層厚５～10㎝であり、上面は掘立柱建物跡等の掘り込み面である。

Ⅴ層　調査区の北半部に分布する黒褐色土。にぶい黄色砂質土を斑状及びブロック状に多く含み、その割合等から３層に細分できる。

(2)　発見遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、溝跡２条、土壙１基である。このほか、建物の柱穴が多数検出され、中には規則的に並ぶものも認められる。しかし、調査区が狭いため、建物として組み合うまでには至らなかった。

ＳＢ3000掘立柱建物跡

建物跡西側が調査区外に延びると推定されるため、全体の規模等は不明であるが、柱穴の配置から南北２間、東西３間以上の東西棟と考えられる。調査区の北壁と東壁の土層観察から、堆積層のⅣ層上面から掘り込まれていることがわかる。平面での重複関係からは、ＳＤ3002溝跡、ＳＫ3003土壙より新しく、他の建物柱穴より古いことがわかる。検出した７基の柱穴（Ｐ17～23）のうち、北側柱列の各柱穴をはじめとする４基で柱材が残存している。また、残る柱穴のうち２基で柱の抜取穴を確認している。方向は、北側柱列でみると、東で約４度南に偏している。規模は、北側柱列では柱間が東から1.90ｍ・1.80ｍ、南側柱列では東から約1.7ｍ・約1.8ｍである。一方、東妻となる東側柱列では総長約4.1ｍで、柱間は北から約2.1ｍ・約2.0ｍである。柱穴の平面形は、おおよそ長方形で、規模は短辺が34～42㎝、長辺が42～48㎝で、検出面からの深さは36～48㎝である。また、残存する柱材は直径12～14㎝である。さらに、２基の柱穴で礎板を確認している。柱穴埋土は、掘り方、抜取穴とも黒褐色土を主体とし、特に掘り方には地山土であるにぶい黄色砂質土が斑状及びブロック状に多く含まれている。

遺物は、掘り方埋土から土師器杯（ロクロ調整）・高台付杯（第３図２）・甕（非ロクロ調整とロクロ調整が混在）、須恵器杯・甕・瓶、平瓦が出土している。このうち、土師器杯には底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施しているもの（第３図１）と、回転糸切り無調整のものがある。一方、須恵器杯には回転ヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものがある。

ＳＤ3001溝跡

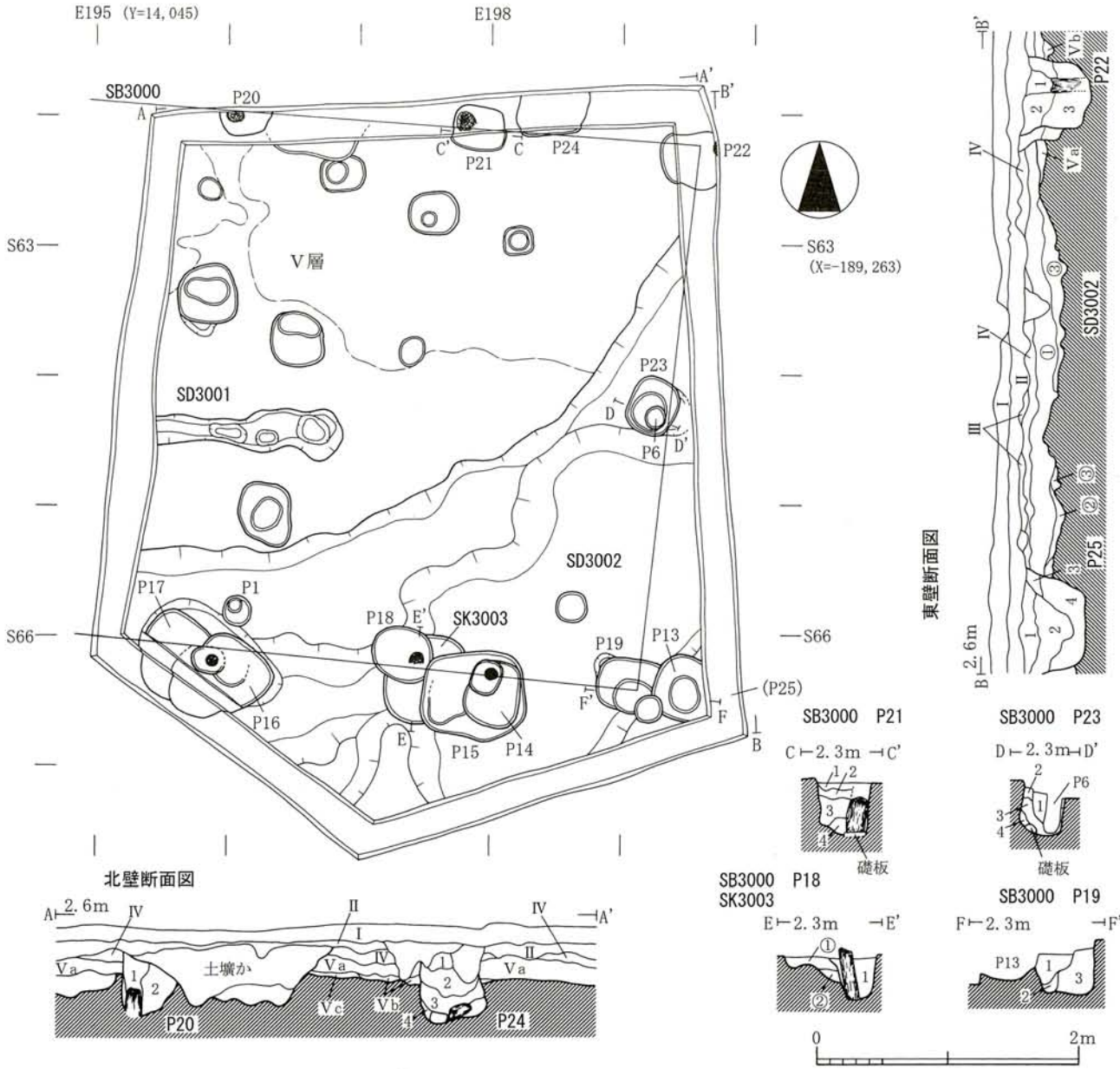
調査区西側で検出された東西方向の小規模な溝跡である。西側が調査区外に延びており、確認できた長さは1.4ｍである。溝の上幅は16～38㎝で一様ではない。一方、深さは4～10㎝で底面には凹凸がみられる。埋土は、黒褐色土の単一層である。

遺物は、土師器甕（ロクロ調整）、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＤ3002溝跡

調査区の北東部から南西部にかけて検出したものである。東・西・南側が調査区外にかかるため、方向や幅等の規模は不明である。重複関係からＳＢ3000建物跡・ＳＫ3003土壙等より古い。また、調査区東壁の土層観察から堆積層Ⅳ層に覆われていることがわかる。底面は、中央付近では凹凸が激しく、一番深い位置で検出面からの深さ約25㎝である。また、北壁付近ではテラス状になり、壁は非常に緩やかに立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられ、上層は黄灰色土、下層は地山土を含んだ黒褐色土であり、その境に植物遺体を含んだ薄い黒褐色土層がみられる。

遺物は、土師器杯（ロクロ調整、１点のみ非ロクロ調整）・蓋・甕（非ロクロ調整とロクロ調整が混在）、須恵器杯・高台付杯（転用硯、第３図11）・蓋・甕、丸・平瓦、土器片製円盤（須恵器瓶を転用）が出土



土層観察表

層位	土色・土性	備考	
基本層位			
Ⅰ	オリーブ黒色土（5Y2/1）	水田耕作土。	
Ⅱ	黒色土（10YR2/1）	灰白色火山灰斑、木炭粒、焼土粒を含む。	
Ⅲ	浅黄色土（2.5Y7/4）	黒褐色土斑を若干含む。	
Ⅳ	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山斑を含む。木炭粒を含む。	
Va	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	
Vb	黒色土（2.5Y2/1）	〃	
Vc	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山斑を多く含む。	
SB3000 P18			
1	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	柱穴掘り方
SB3000 P19			
1	黒色土（10YR1.7/1）	木炭粒を多く含む。	柱抜取穴
2	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを含む。	〃
3	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	柱穴掘り方
SB3000 P20			
1	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山斑を若干含む。	柱痕跡
2	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	柱穴掘り方
SB3000 P21			
1	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを含む。	柱穴掘り方
2	にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）	黒褐色土斑を若干含む。	〃
3	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山斑を若干含む。	〃
4	黄灰色砂質土（2.5Y4/1）	黒褐色土斑を若干含む。	〃
SB3000 P22			
1	黒褐色土（2.5Y3/1）	木炭粒を若干含む。	柱痕跡
2	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを含む。	柱穴掘り方
3	黒色土（2.5Y2/1）	〃	〃
SB3000 P23			
1	黄灰色土（2.5Y4/1）	地山斑を含む。	柱抜取穴
2	暗灰黄色土（2.5Y4/2）	〃	柱穴掘り方
3	黒褐色土（2.5Y3/1）	〃	〃
4	にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）		〃
P24			
1	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山斑を含む。	柱抜取穴か
2	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	〃
3	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを含む。	〃
4	オリーブ黒色砂質土（10Y4/1）	黒褐色土斑を若干含む。	柱穴掘り方
P25			
1	暗灰黄色土（2.5Y4/2）	地山斑を含む。	柱抜取穴か
2	黄灰色土（2.5Y4/1）	地山ブロックを多く含む。	〃
3	にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）	黄灰色土斑等を多く含む。	柱穴掘り方
4	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	〃
SD3002			
①	黄灰色土（2.5Y4/1）	地山斑を若干含む。木炭粒を含む。	
②	黄灰色土（2.5Y3/1）	植物遺体を含む。	
③	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを含む。	
SK3003			
①	黒褐色土（2.5Y3/1）	下層との境に薄い木炭層がある。	
②	黒褐色土（2.5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。	

第2図　遺構平面図・断面図

している。このうち、土師器杯には底部に回転ヘラケズリ調整を施しているものがある。一方、須恵器杯の底部切り離しと再調整の技法には、回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整、回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整、切り離し技法が不明で回転ヘラケズリ調整、回転ヘラ切り無調整、回転糸切り無調整のものがある。この中では、回転ヘラ切り無調整のもの（第３図５～10）の出土量が最も多く、底部調整等のわかる出土資料59点中53点を占め、全体の９割近くにのぼる。

ＳＫ3003土壙

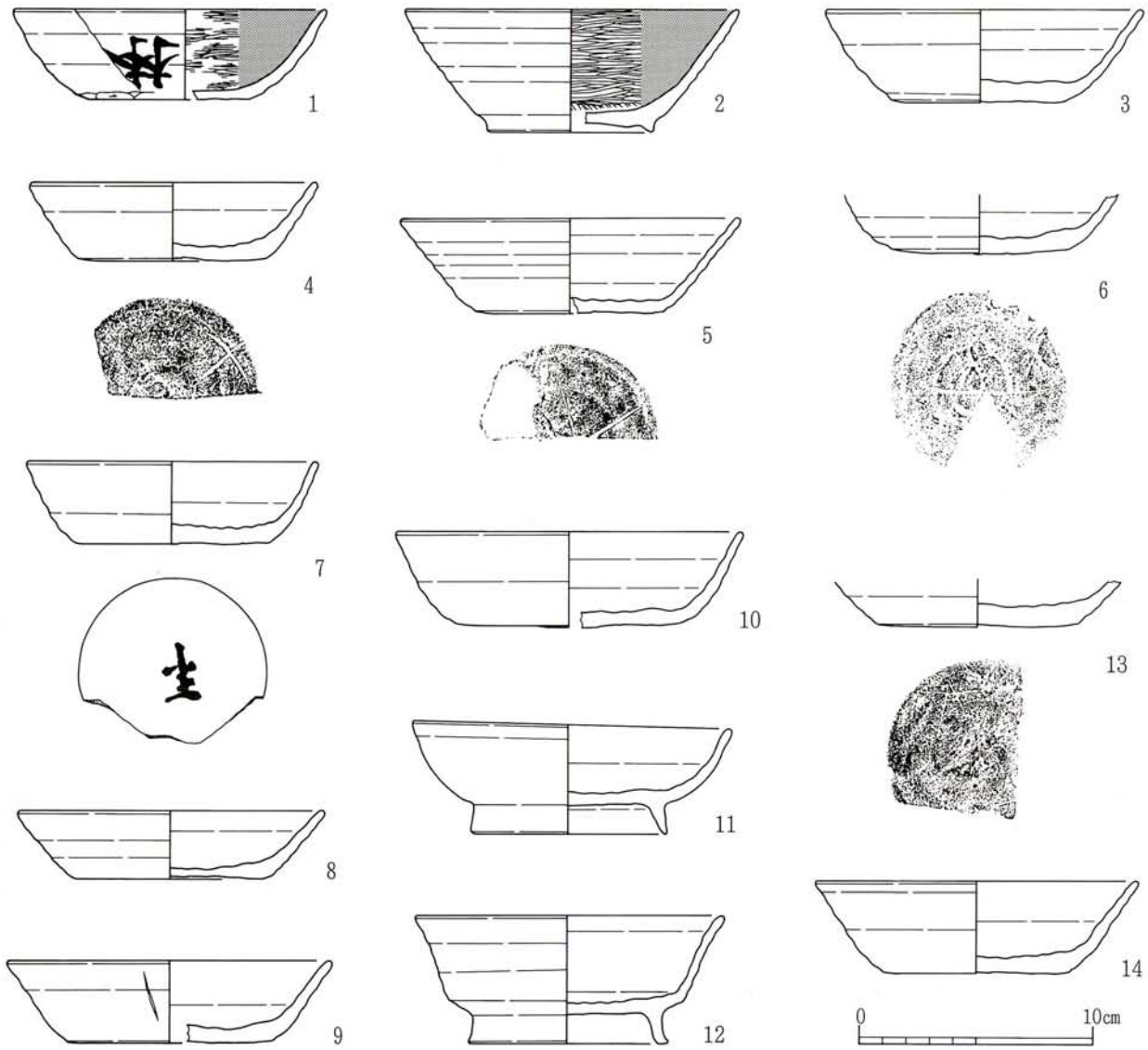
調査区南側で検出した。重複関係からＳＤ3002溝跡より新しく、ＳＢ3000建物跡より古い。他の遺構に壊されている部分が多いため明確とは言い難いが、残存状況からみると平面形はほぼ円形で径約70㎝、断面形はすり鉢形に近く、深さ約20㎝である。埋土は２層に分けられ、上層は黒褐色土、下層は同様の黒褐色土に地山ブロックを多く含んでいる。

遺物は、土師器甕（非ロクロ調整）、須恵器杯が出土している。

３．まとめ

今回の調査で発見された主な遺構について、その重複関係をみるとＳＤ3002溝跡→ＳＫ3003土壙→ＳＢ3000建物跡という新旧関係になる。これらの遺構は、10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰斑を上部に含む堆積層のⅡ層に覆われることから、一番新しいＳＢ3000建物跡の下限年代は、これをやや遡る時期に求めることができる。また、10世紀前葉頃に出現するとされる須恵系土器は、Ⅱ層からはわずかに出土するが、各遺構の出土遺物にはみられない。一方、一番古いＳＤ3002溝跡については、土師器はロクロ調整のものが主体を占め、これに非ロクロ調整のものが混じっている。また、須恵器の杯においては、ロクロからの切り離しと再調整の技法が、回転ヘラ切り無調整のものが全体の約９割を占めている。さらに、杯の口径に対する底径の比率（底口比）が0.54～0.65の間に分布し、比較的大きな数値を示すことなど、９世紀前葉から中葉に位置付けされる出土遺物の傾向や特徴がみられる。しかし、今回の調査では、調査面積が非常に狭いことや、各遺構出土の遺物に年代決定の根拠となるようなものがなく、大きさ等の正確な数値が得られるものも少ないことから、遺構毎に詳しい年代を導き出すまでには至れない。したがって、今回検出の各遺構の年代については、おおよそ９世紀代の変遷であると理解するだけにとどめておきたい。

次に、ＳＢ3000建物跡について若干ふれると、この建物跡は前述のように多賀城南面に方格地割りが施行され、町並みが形成されていた時期に存在していたものである。その位置は、東が東２道路、西が東１道路、北が東西大路の東側延長線上に延びる東西道路に画される区画内にあたる。さらに、東２道路との間の距離は約14ｍで、方向もほぼ一致することが、平成11年度実施の第26次調査の成果により判断できる。この調査においては、同じ区画内に規模や方向をほぼ同じくする建物跡を数多く検出している。特にＳＢ3000建物跡の北隣には、２間×３間の南北棟建物跡が位置し、この建物跡の西側柱列とＳＢ3000建物跡の東側柱列とは柱筋を揃えて配置されている。このことから、ＳＢ3000建物跡は他の建物跡と同様、この区画内を構成する建物群の一つとして捉えることができる。

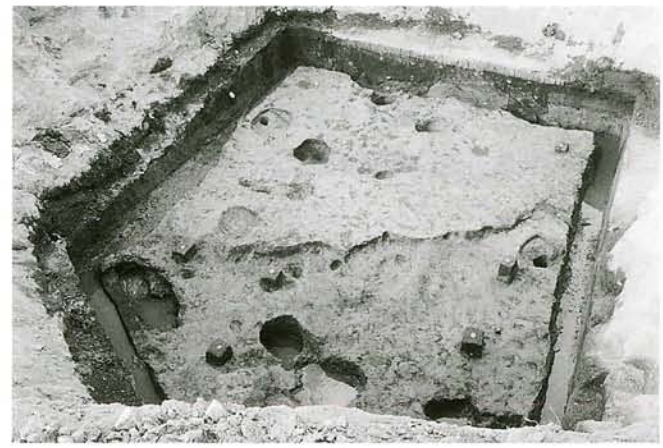


単位：cm　（　）は推定値

番号	種類	器種	遺構・層位	外面調整等	内面調整	残存	口径	底径	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器	杯	SB3000　P19	ロクロナデ 底部～体部下　手持ヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理	4/24	(13.4)	(6.8)	3.9	1－4	1	体部に「林」の墨書
2	土師器	高台付杯	SB3000　P19	ロクロナデ 底部　回転糸切り	ヘラミガキ ・黒色処理	6/24	(14.3)	(7.1)	5.3	－	2	
3	須恵器	杯	P 1	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	16/24	(13.6)	7.4	4.0	1－1	4	
4	須恵器	杯	P 14	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	6/24	(12.3)	(8.0)	3.4	－	5	底部に「＋」のヘラ描
5	須恵器	杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	4/24	(14.5)	(8.1)	4.1	－	9	底部に「×」のヘラ描
6	須恵器	杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	体～ 底部	－	7.6	－	－	10	底部に「－」のヘラ描
7	須恵器	杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	7/24	(12.5)	8.1	3.6	1－5	11	底部に「坐」の墨書
8	須恵器	杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	10/24	(13.1)	(8.1)	3.0	－	12	
9	須恵器	杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	4/24	(13.9)	(8.8)	3.5	－	13	体部に「＼」のヘラ描
10	須恵器	杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	8/24	(14.8)	(8.0)	4.1	－	14	
11	須恵器	高台付杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	18/24	13.6	8.4	4.8	1－2	15	底部内面に墨痕 転用硯
12	須恵器	高台付杯	SD3002　1層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	13/24	(13.2)	8.6	5.5	1－3	16	
13	須恵器	杯	Ⅱ層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	体～ 底部	－	(8.6)	－	－	20	底部に「人」のヘラ描
14	須恵器	杯	Ⅱ層	ロクロナデ　底部　ヘラ切り	ロクロナデ	8/24	(13.8)	(8.0)	4.0	－	21	

第3図　出土遺物

遺構検出状況（南より）



遺構完掘状況（南東より）

調査区北壁土層堆積状況（南より）

調査区東壁・SD3002溝跡土層堆積状況（西より）

1．須恵器　杯　　（第３図３）
2．須恵器　高台付杯　（第３図11）
3．須恵器　高台付杯　（第３図12）
4．土師器　杯（墨書）（第３図１）
5．須恵器　杯（墨書）（第３図７）

写真図版１　調査状況、出土遺物

Ⅳ．市川橋遺跡第32・33次調査

1．調査に至る経緯と経過

本調査は、城南地区土地区画整理地内の個人住宅建設に伴うものである。当該地周辺では、近年、区画整理に伴う大規模な発掘調査が実施され、地方古代都市に関わる遺構・遺物が多数発見されている。

今回の建設工事は、基礎工法に細い鋼管を打ち込むパイル工法をとることから、埋蔵文化財に影響を及ぼすことが考えられた。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、結論としてパイル工法によるものとなった。これを受け地権者から11月16日に第32次調査区、11月18日に第33次調査区の調査依頼が提出された。

調査は両地区が東西に隣接することから、作業の効率性を考え11月27日より同時に開始した。はじめに重機による盛土および堆積層の除去を行い、29日から作業員が入り各々の調査区で遺構検出作業に入った。以下、調査次ごとにその後の経過を記載する。

第１図　調査区位置図

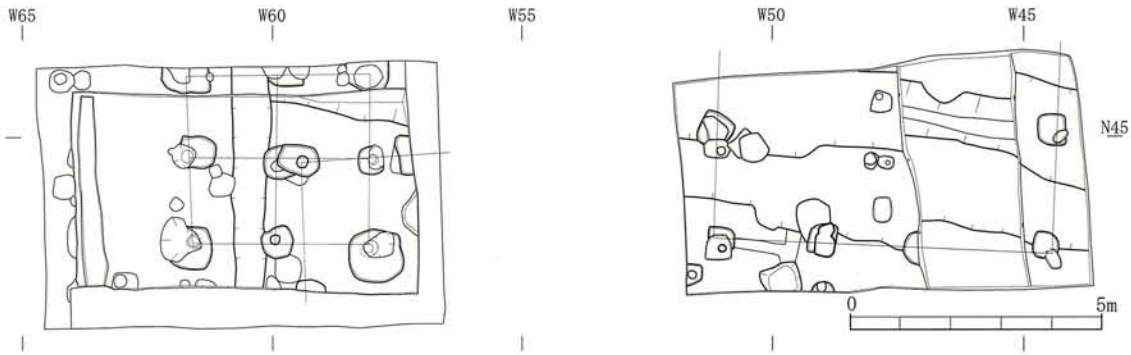
(1)　第32次調査

12月2日には、ほぼ遺構の概要が把握され、東西・南北方向の溝跡各１条、掘立柱建物跡２棟の他柱穴が多数発見された。速やかに実測図作成のための基準杭を設定し、平面図作成に取りかかる。平面図終了後、各遺構の掘り下げを行い断面図の作成、平面図の補正を行う。掘立柱建物跡の内１棟は、総柱の建物になる可能性も出てきたことから、若干北側に拡張し建物の延びを確認した。その結果、ＳＢ3005とした2間×2間の総柱建物になることが判明した。12月12日～13日にかけては、調査区内の基本層序の検討を行い、遺構の掘り込み面等の確認をした後、土層断面の写真撮影、実測図の作成をする。12月17日には、器材の撤収、埋め戻しを行い一切の調査を終了した。

(2)　第33次調査

11月29日から遺構検出作業を行い、掘立柱建物跡1棟、溝跡2条を発見した。12月3日より平面図作成のための基準杭を設定し平面図を作成する。平面図作成終了後、随時柱穴を半截し、断面図を作成した。12月9日には建物跡の調査を終了し、溝跡の掘り下げを開始した。12月13日には溝跡を完掘し、全景写真撮影を行った。12月16日に器材の撤収、12月18日に調査区の埋め戻しを行い一切の調査を終了した。

なお、両調査区の発掘基準線の設定にあたっては、第31次調査と同様の表記方法をとった。



第32次調査区　　第33次調査区

第２図　調査区配置図

２．調査成果

(1)　基本層序

今回の調査区で確認された基本層序は以下のとおりである。

大別して6層に分層され、いずれも水平堆積である。

Ⅰa層　区画整理に伴う盛土層　層厚約1.3m

Ⅰb層　現代の水田耕作土層　層厚10～15cm

Ⅱa層　黒色粘質土で層厚2～5cm　古代の土器細片含む

Ⅱb層　暗灰色土で層厚3～10cm　古代の土器細片含む

Ⅲ 層　黄灰色土で層厚10～20cm　灰白色火山灰粒・小ブロックを上位から中位に含む
古代の土器片含む　ＳＢ3004・3005の検出面

Ⅳ 層　黄灰色粘質土で層厚10～20cm　古代の土器片含む　ＳＤ3006の検出面

Ⅴ 層　暗灰黄色粘質土で層厚5～15cm　Ⅵ層ブロックが混じる　下面は凹凸有り

Ⅵ 層　灰黄色土　地山　ＳＤ3007の検出面

(2)　発見遺構と遺物

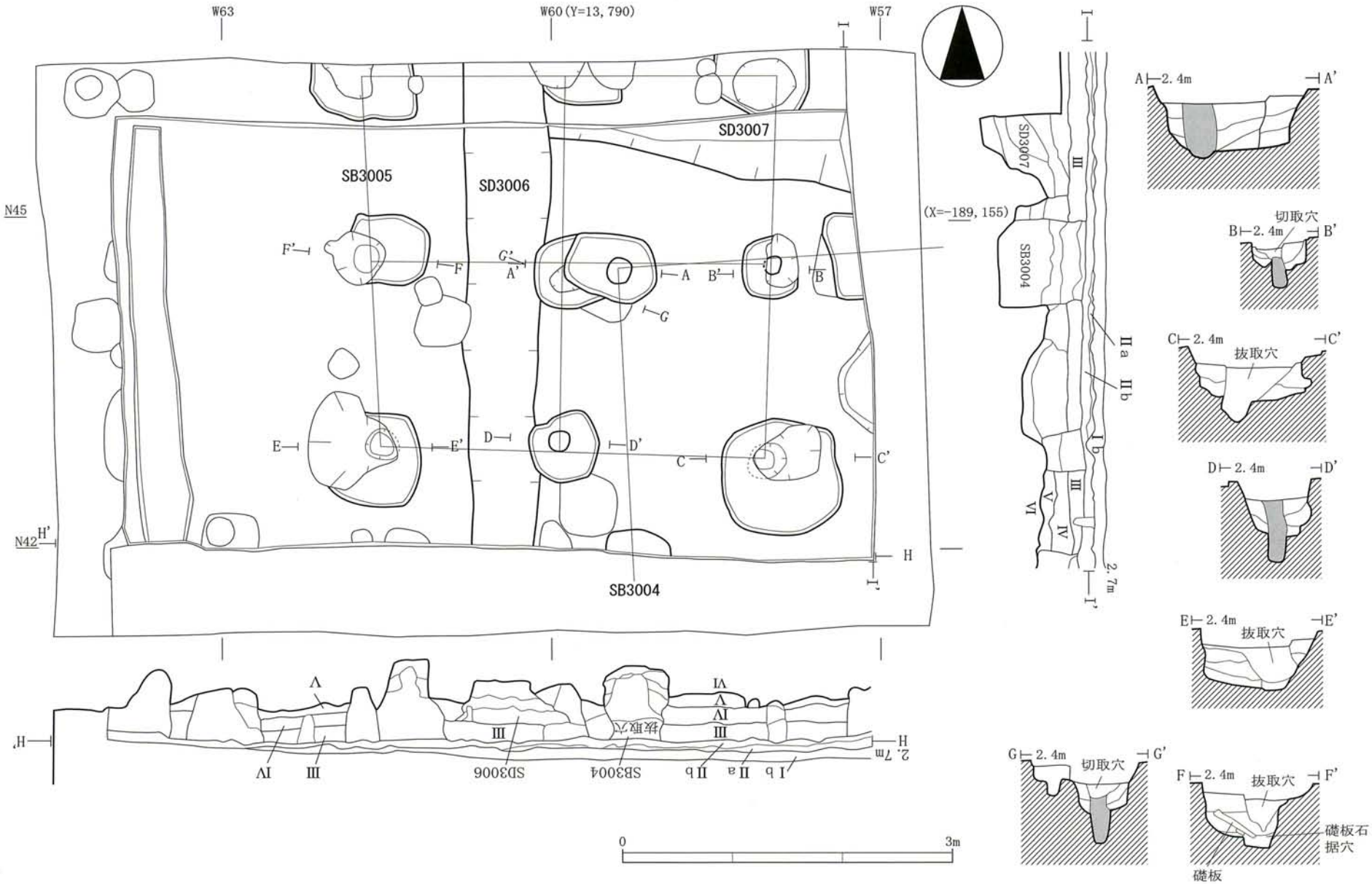
ＳＢ3004掘立柱建物跡

第32次調査区の東側で検出した掘立柱建物跡である。Ⅲ層上面から掘り込まれており、Ⅱb層に覆われている。東西１間以上、南北１間以上の建物跡で、大部分が調査区外へと延びており、３基の柱穴を確認したにすぎない。３基の柱穴のうち１基に柱痕跡ともう１基に抜取穴を確認した。ＳＢ3005建物跡と重複しており、それより新しい。方向は、西側柱列でみると北で約３度西に偏している。柱間は、東西が2.2m以上、南北が2.6m以上である。柱穴は、平面形が60～80cmの隅丸方形で、検出面からの深さは70～80cmである。掘り方埋土は、黄灰色土が主体で灰白色火山灰粒が混じる。柱痕跡は直径約20cmの円形である。

遺物は掘り方埋土を主として、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、丸瓦が少量出土している。土師器杯はいずれもロクロ調整であり、底部は回転糸切りが大半を占める。この他に墨書土器が１点ある（第６図１）。

ＳＢ3005掘立柱建物跡

第32次調査区のやや東よりで検出した東西２間、南北２間の東西棟総柱建物跡である。Ⅲ層上面から掘



第３図　第32次調査平面図・断面図

り込まれており、Ⅱb層に覆われている。柱穴は9基すべて発見し、うち3基で柱痕跡を検出した。このうち2基は柱切取穴の底面付近で確認した。また、抜取穴も3基で検出し、このうち1基では礎板と礎板石がすえられていた。ＳＢ3004建物跡、ＳＤ3006・3007溝跡と重複しており、ＳＢ3004建物跡より古くＳＤ3006・3007溝跡より新しい。方向は、南側柱列でみると東で約3度南に偏している。桁行については、南側柱列で3.5m、柱間は西から1.7m、1.8mである。梁行については、東妻で3.44m、柱間は北から1.76m、1.68mである。柱穴は、隅丸方形を呈し、一辺が0.8～1.1m（隅柱）のものと0.5～0.65mを計るものとに分かれる。検出面からの深さは80～105cmである。掘り方埋土は、灰色粘質土が主体で灰白色火山灰粒が混じる。柱痕跡は、直径約20cmの円形で、隅柱については柱のあたりから想定すると約30cmである。

遺物は掘り方埋土を主として、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯・高台付杯、丸瓦、土器片製円盤、炉壁、砥石が出土している。土師器杯はいずれもロクロ調整で、底部は回転糸切りが大半を占める。須恵器杯の底部も大半が回転糸切りである。

ＳＢ3008掘立柱建物跡

第33次調査区のⅥ層上面で発見した桁行3間、梁行1間以上の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は6基検出し、柱は全て抜取られていた。ＳＤ3007・3009溝跡と重複があり、これらよりも新しい。方向は南側柱列でみると、東で約3度南へ偏している。桁行については、南側柱列で総長6.6m、柱間は西より2.1m、1.8m、2.7m、梁行については、東妻で2.3m以上である。柱穴の平面形は方形であり、掘り方の規模は一辺50～70cmである。深さは検出面より30～50cmである。抜取穴埋土は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土、掘り方埋土は地山ブロックを含む暗灰黄色粘質土である。

遺物は、抜取穴より土師器杯（ロクロ調整）・甕（ロクロ調整）、須恵器杯（ヘラ切り）・甕が出土している。

ＳＤ3006溝跡

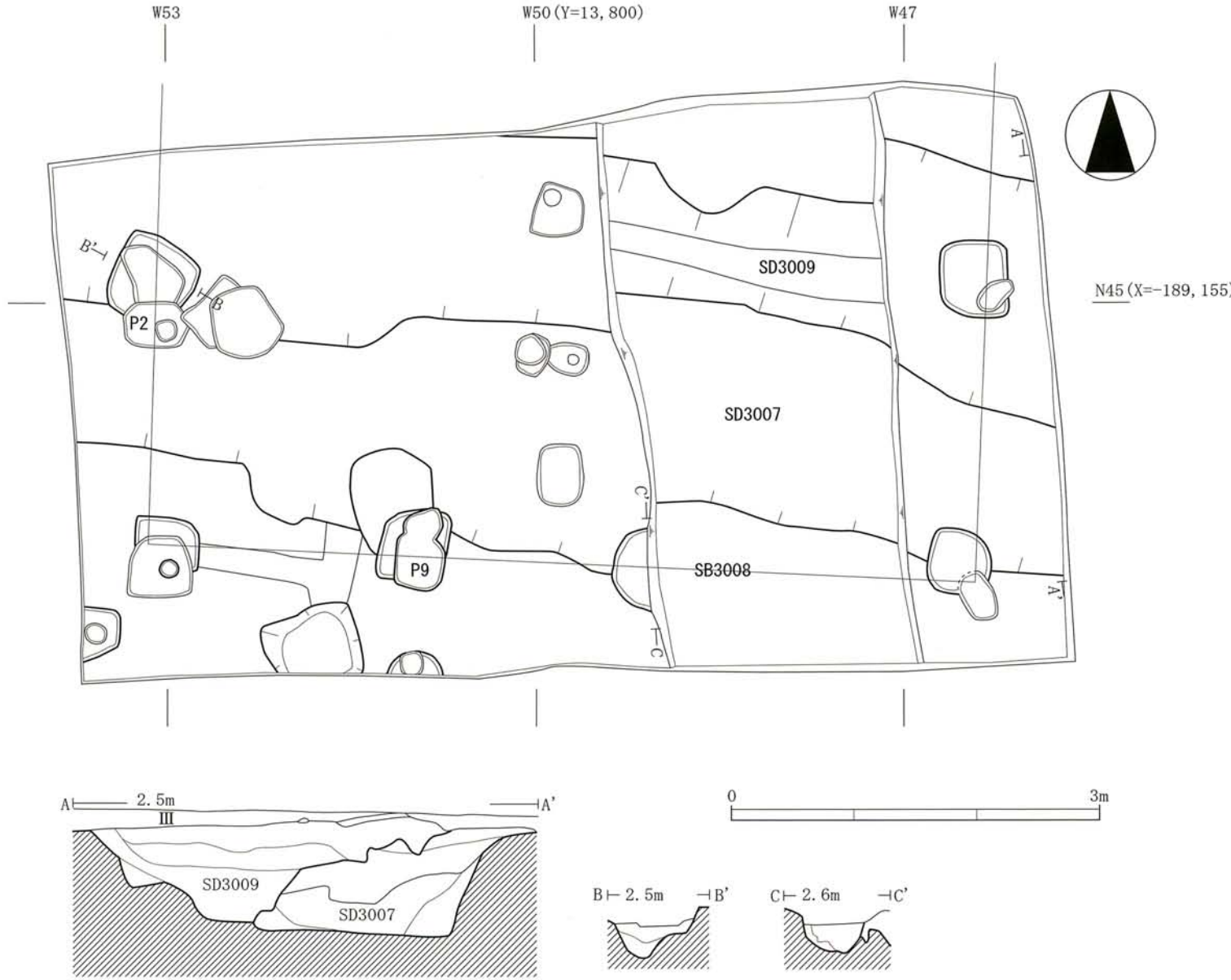
第32次調査区のほぼ中央付近で検出した南北溝跡である。Ⅳ層上面から掘り込まれており、Ⅲ層に覆われている。南壁から北壁にかけて約4.4m検出し、さらに調査区外へ延びている。ＳＢ3005建物跡、ＳＤ3007溝跡と重複しており、ＳＢ3005建物跡より古くＳＤ3007溝跡より新しい。方向は、北で約1度西に偏している。規模は、上幅0.6～0.8m、下幅0.4～0.5m、深さ40cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色～暗灰色粘質土で、3層に分層される。いずれもほぼ平行に自然堆積する。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、丸瓦が少量出土している。土師器杯はいずれもロクロ調整のものであり、底部や体部に手持ちヘラケズリしたものがある。須恵器杯には回転糸切りのものがある。

ＳＤ3007溝跡

第33次調査区から第32次調査区にかけてのⅥ層上面で検出した東西溝跡である。長さは15mまで確認した。SB3005・3008建物跡、SD3006・3009溝跡と重複があり、これらよりも古い。方向は東で約7度南に偏する。規模は上幅1.85m以上、下幅1.30m、深さ87cmである。埋土は、大きく2層にわけられ、上層は地山ブロックを多量に含む人為的に埋められた土層であり、下層は暗灰黄色粘質土の自然堆積層である。

遺物は、上層から土師器杯（ロクロ調整）・甕（ロクロ調整・非ロクロ調整）・甑、須恵器杯（ヘラ切り・糸切り）・甕、墨書土器、漆付着土器、平瓦、石帯（丸鞆）が出土し、下層からは須恵器杯（ヘラ切り）、木簡状木製品、箸状木製品が出土している。



第４図　第33次調査平面図・断面図

ＳＤ3009溝跡

第33次調査区第Ⅵ層上面で検出した東西溝跡である。長さは8.2ｍまで確認した。ＳＤ3007溝跡、ＳＢ3008建物跡と重複があり、ＳＤ3007溝跡より新しく、ＳＢ3008建物跡より古い。方向は東で約６度南に偏する。規模は上幅1.80ｍ、下幅0.40ｍ、深さ76cmである。埋土は、大きく2層に分けられ、1層は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土、2層は地山ブロックを少量含む黒褐色粘質土層である。

遺物は、土師器杯（ロクロ調整）・甕（ロクロ調整)、須恵器杯（ヘラ切り・回転糸切り）・甕・瓶、墨書土器、製塩土器、土錘が出土している。

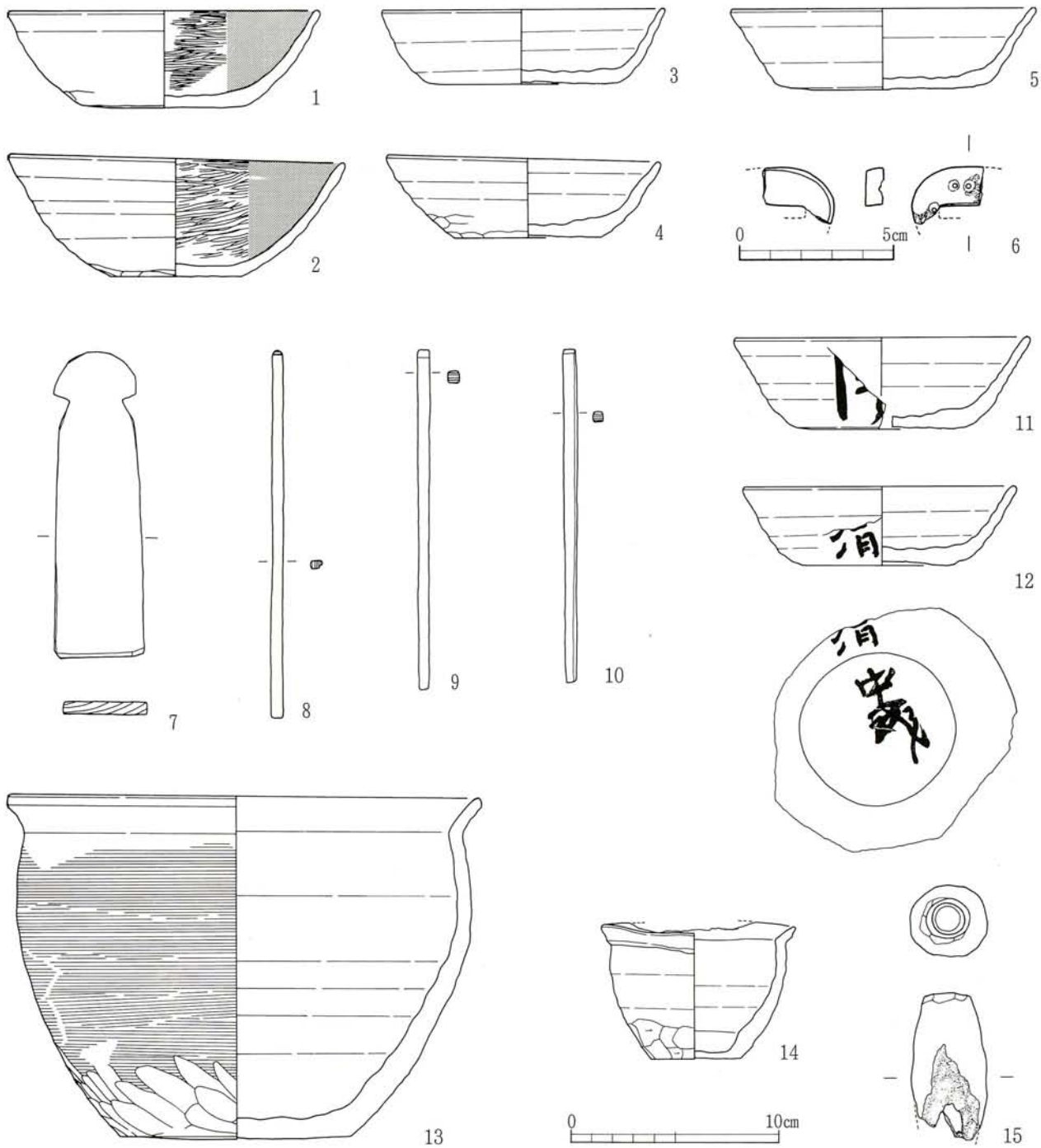
３．遺構外出土の遺物（第６図）

基本層のⅡ・Ⅲ層より、土師器杯・高台付杯・鉢・甕、須恵器杯・長頸瓶・甕・蓋、須恵器土器杯・高台付杯、丸瓦・平瓦、土製カマド、製塩土器、土器片製円盤、砥石が出土している。

４．まとめ

(1) 掘立柱建物跡(ＳＢ3004・3005)の年代は、Ⅲ層上面から掘り込まれていることから灰白色火山灰降下以後の時期、10世紀前葉以降とすることができる。これはⅢ層中および柱穴埋土に須恵系土器が含まれていることと矛盾しない。

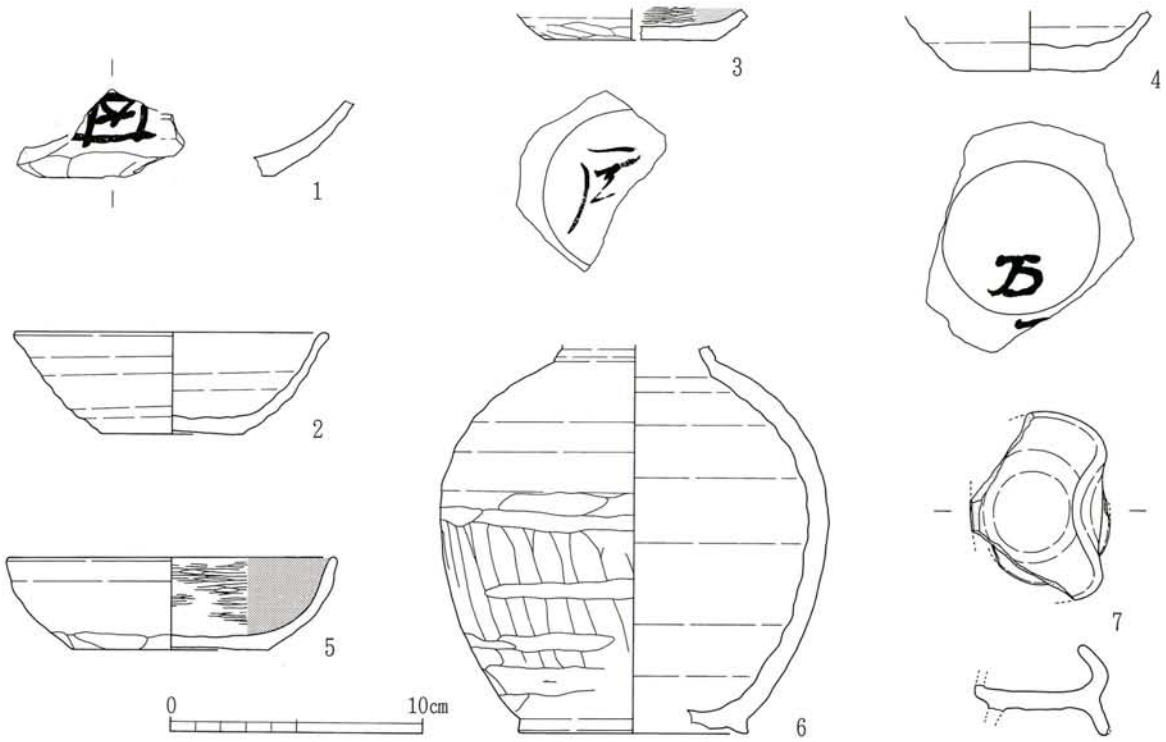
(2) 溝跡（ＳＤ3006・3007）の年代は、Ⅲ層に覆われていることから、灰白色火山灰降下以前の時期、10世紀前葉以前とすることができる。上限年代は、いずれの遺構でもロクロ調整の土師器で占められることから、８世紀末頃と考えられる。



単位：cm　（　）は推定値

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版	登録番号
1	土師器	杯	SD3006 埋土	ロクロナデ、底部切り離し不明→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁～底部	(14.9)	7.8	4.7			32-3
2	土師器	杯	SD3006 埋土	ロクロナデ、底部切り離し不明→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁～底部	(16.1)	(6.3)	5.8			32-4
3	須恵器	杯	SD300埋土	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	口縁～底部	(14.6)	(8.3)	3.9			32-5
4	須恵器	杯	SD3007 1-2	ロクロナデ、底部ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁～底部	(13.2)	7.0	3.8			33-9
5	須恵器	杯	SD3007 1-2	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	口縁～底部	(13.5)	9.1	3.6		2-1	33-8
6	石帯	丸鞆	SD3007 1-2	計測値：2.3×1.8×0.6							2-8	33-10
7	木簡状木製品		SD3007 1-3	計測値：14.8×4.3×0.6								33-1
8	箸状木製品		SD3007 1-3	計測値：17.8×0.6×0.4								33-2
9	箸状木製品		SD3007 1-3	計測値：16.5×0.6×0.6								33-3
10	箸状木製品		SD3007 1-3	計測値：16.1×0.7×0.5								33-4
11	須恵器	杯	SD3009 1-2	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	口縁～底部	(14.2)	(8.0)	4.4	墨書「□」		33-5
12	須恵器	杯	SD3009 1-2	ロクロナデ、底部ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁～底部	(13.1)	7.3	3.8	「酒ヵ」「中成」	2-7	33-4
13	須恵器	甕	SD3009 1-2	ロクロナデ、体部回転ハケメ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁～底部	(22.7)	11.1	16.6		2-10	33-6
14	土師器	甕	SD3009 1-2	ロクロナデ、底部切離し不明→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁～底部	(9.3)	4.3	6.5			33-3
15	土錘		SD3009 1-1	端部ヘラケズリ　計測値：7.0×3.5　穴径1.2							2-9	33-7

第5図　SD3006・3007・3009溝跡出土遺物

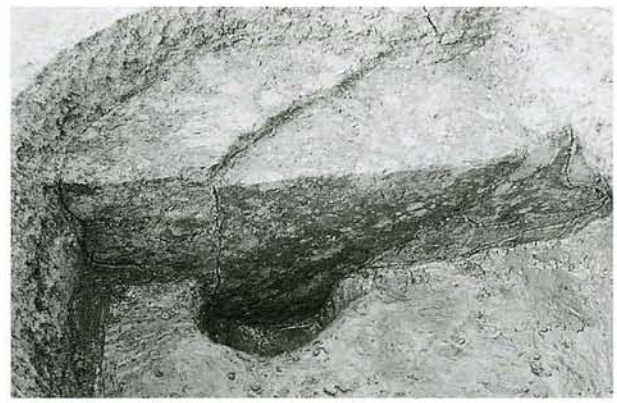


単位：cm　（　）は推定値

番号	種　別	器　種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版	登録番号
1	土師器	杯	SB3004 掘方	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	体部～底部				墨書「□」	2-6	32-1
2	須恵器	杯	SB3005 埋土	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁～体部	(12.5)	5.6	4.1			32-2
3	土師器	杯	SB3008 埋土	ロクロナデ、底部切離し不明→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	体部～底部		(6.8)		墨書「厨」	2-4	33-1
4	須恵器	杯	P-2　埋土	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	体部～底部		5.7		墨書「万」	2-5	33-2
5	土師器	杯	L-Ⅱ	ロクロナデ、底部回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁～底部	(13.1)	(7.9)	3.7			32-6
6	須恵器	長頸瓶	L-Ⅲ	ロクロナデ、体部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	体部～底部		(9.0)	(15.4)		2-11	32-8
7	土師器	耳皿	L-Ⅲ	ロクロナデ	ロクロナデ				3.6		2-2	32-7

第6図　掘立柱建物跡、基本層出土遺物

第32次調査区全景　（東より）



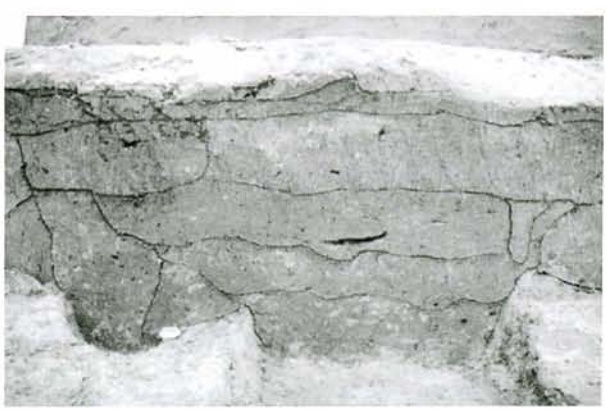
SB3005柱穴断面

SB3005礎板検出状況

SB3005礎板石検出状況

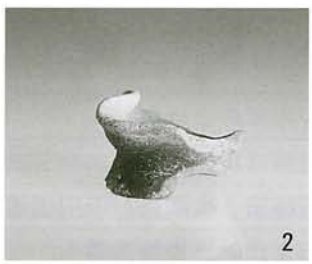
第33次調査区全景　（西より）

SB3008　（西より）



SD3006断面　（北より）

SD3007・3009断面　（西より）



1．須恵器杯　（第５図５　S:1/3）
2．土師器耳皿　（第６図７　S:1/3）
3．土師器甕　（第５図14　S:1/3）
4．須恵器杯　（第６図３　S:1/3）
5．須恵器杯　（第６図４　S:1/3）
6．土師器杯　（第６図１　S:1/3）
7．須恵器杯　（第５図12　S:1/3）
8．石帯（丸鞆）（第５図６　S:1/1）
9．土錘　（第５図15　S:1/2）
10．須恵器甕　（第５図13　S:1/3）
11．須恵器長頸瓶（第６図６　S:1/3）

写真図版２

報告書抄録

ふりがな	やはぎがたてあとほか
書名	矢作ヶ館跡ほか
副書名	矢作ヶ館跡第３次調査　市川橋遺跡第31次調査　市川橋遺跡第32・33次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第71集
編著者名	島田　敬、相澤　清利、鈴木　孝行、若松　啓文
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番１号　TEL022-368-0134
発行年月日	西暦2003年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢作ヶ館跡（やはぎがたてあと） （第３次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 留ヶ谷（とめがや）二丁目 地内	042099	18029	38度 18分 10秒	141度 00分 42秒	平成14年 ７月18日 ～ ８月27日	824㎡	宅地造成
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第31次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 高崎字水入（たかさきあざみずいり） 地内	042099	18008	38度 17分 42秒	140度 59分 39秒	平成14年 11月５日 ～ 11月22日	25㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第32次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 市川字鴻ノ池（いちかわあざこうのいけ） 地内	042099	18008	38度 17分 43秒	140度 59分 28秒	平成14年 11月27日 ～ 12月17日	28㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第33次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 市川字鴻ノ池（いちかわあざこうのいけ） 地内	042099	18008	38度 17分 43秒	140度 59分 28秒	平成14年 11月27日 ～ 12月18日	36㎡	個人住宅 建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢作ヶ館跡 （第３次調査）	集落跡 城館跡	古代 中世	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、堀跡、土壙	土師器、須恵器、瓦、古瀬戸	中世の堀跡を発見した。
市川橋遺跡 （第31次調査）	集落跡	平安	掘立柱建物跡、溝跡、土壙	土師器、須恵器、瓦	
市川橋遺跡 （第32次調査）	集落跡	平安	掘立柱建物跡、溝跡	土師器、須恵器、須恵系土器、瓦	
市川橋遺跡 （第33次調査）	集落跡	平安	掘立柱建物跡、溝跡	土師器、須恵器、製塩土器、石帯	

多賀城市文化財調査報告書第71集

矢作ヶ館跡ほか

－ 矢作ヶ館跡第３次調査 －
－ 市川橋遺跡第31次調査 －
－ 市川橋遺跡第32・33次調査 －

平成15年３月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（０２２）３６８－０１３４

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話（０２２）３６８－１１４１

印刷　有限会社　工陽社
宮城県塩竈市尾島町８番７号
電話（０２２）３６５－１１５１

R100 PRINTED WITH SOY INK 古紙配合率100%再生紙を使用しています
印刷には大豆油インキを使用しています